

自然と共にある暮らしが地球を守る



歌手  
加藤 登紀子

2000年に国連環境計画（UNEP）親善大使に就任して以来、世界各地の環境問題の現場や自然保護の取り組みを視察している加藤登紀子さん。これまでに10カ国を訪れ、人間の力が引き起こす環境破壊に心を痛めながらも、歌やメディアを通して世界中に現状を伝え、問題解決に向けて足元からの取り組みを訴えている。

生きることをテーマに歌い続ける加藤さんにとって「歌うことと環境のための活動は、前に進むための車の両輪のようなもの」。地球の未来への真摯な思いが、多くの人の琴線に触れる数々の歌を生み出してきた。

今年8月、11カ国目に当たるマレーシアを訪問。豊かな生物多様性を誇る森林が消えつつあるボルネオ島で彼女が目にした現実、そして希望の光となる出会いとは……。(続きは55ページ)

## 「自然とのバランスを考慮した 持続可能な開発を」

歌手

### 加藤 登紀子

Kato Tokiko

1943年ハルビン生まれ。65年東京大学在学中に歌手デビュー。以後、60枚以上のアルバムと多くのヒット曲を世に送り出し、世界各地でコンサートを行っている。地球環境問題にも積極的に取り組み、97年にWWFジャパン(世界自然保護基金日本委員会)評議員に、2000年UNEP親善大使に就任。アジアやオセアニア各地を精力的に訪れ、自らの目で見えた自然環境の現状を広く伝えるほか、音楽を通じた交流を重ねている。国内では、千葉県鴨川市の農園「鴨川自然王国」を拠点として、若い世代とともに循環型社会の実現に向けて活動を続けている。



photos by Suto Naotoshi

8月、ボルネオ島を訪問しました。油ヤシのプランテーションがものすごい勢いで拡大し、野生動物の生息地を脅かしていると聞き、その状況と自然保護の取り組みを見るためです。原油価格の上昇や地球温暖化への危機感から、脱石油やバイオエネルギーの利用が推進され、私たちの日常生活でも「地球に優しい」のうたい文句で、油ヤシが原料のパーム油などの天然素材で作られた日用品の需要が増えています。しかし、そのパーム油が実は地球に優しくなくなっているのです。

マレーシアのサバ州では年間9万ヘクタール、東京23区の1.5倍分の面積が油ヤシのプランテーションに転換され、また、プランテーションで使用される農薬や化学肥料が河川を汚染しています。実際に目に見ると驚きますが、車で5時間走る間ずっと油ヤシ林が続くのです。需要が伸びると分かっているので、資本がどんどん入ってきて、歯止めをかけるのが難しい。ボルネオ島のインドネシア側では山火事が深刻ですが、どうせプランテーションに開発されるのだから燃えてしまったほうがいいという声もあるそうです。

しかし、熱帯林の減少によって生態系が崩れると、例えば油ヤシ林を荒らすネズミが大量発生したりして、プランテーションが大きな被害を受けることも考えられます。開発する側は自然とのバランスを考慮した持続可能な開発を目指していかなければなりません。

今回、「ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラム(BBEC)」のさまざまな活動を視察したのですが、中でも思い出深いのが、森で

昔ながらの自給自足の暮らしを営む、わずか15軒のダガット村です。村人は投げ網漁で細々と川のエビや魚を捕ったり、自然農法で野菜を栽培したり、まさに森の恵みで生きています。開発業者に土地を売ってしまう人が多い中、この村の人々は森と暮らしを守るため、BBECの支援でエコツーリズムを導入しました。村の若者が中心となって、観光客を受け入れてホームステイや自然体験をしてもらうエコツアーを行っています。私も2日間でしたが素晴らしい体験をしました。

特に感動したのは、村人みんな歌も踊りも上手なこと。自分たちで作った民族衣装をまとい、手作りの楽器を演奏し、伝統的な民謡を歌う。その土地にしかない文化や暮らしが自然と共に守られていることが、本当の地球の豊かさなのだと実感しました。そういうコミュニティが存在してやっと自然が守られていくのだと思います。伝統文化が断ち切られた、便利なだけの居住空間で、工場で生産するように作られた食べ物で生きる私たちは、自らの暮らしを見直す必要があります。

私自身、地球の厳しい現状を見て大変だと言っているだけではだめなので、まず自分の生活を振り返ると同時に、多くの人に情報を伝え、環境に負荷をかけない生き方をみんなで作っていきたくと思っています。こうした活動や未来を思う気持ちを、歌を通して届けていけたらと願っています。また、訪問する国々で、ダガット村のように、歌うことと生きることがこれほど密接につながっているのかと気付かされる暮らしに出会うことが多く、私に大きなエネルギーをくれます。